

富山県の地場産業に関する考察

——福光町のバット製造業を事例として——

高木裕子

富山県西砺波郡福光町は、野球用バットの生産量日本一を誇っており、バット製造業は地場産業としてこの山麓の町の発展に貢献しつづけている。

福光町にバット製造業が立地した要因としては、①既に木工業が発達しており、関連技術の蓄積があった②大手生産工場の創始者が名古屋からバット製造の技術を導入した③庄川流域にバットの原木となるトネリコが豊富にあった、という3つの要因が考えられる。しかし、原材料立地に負うところが大きかったバット製造業も、最近では原材料を北海道、アメリカ、東南アジアなどの遠隔地に求めており、この要因はほとんど作用していない。また、産地化していることによる集積の利益についても、産地内の業者間のつながりが弱く、歴史的に蓄積された技術の集積という点でのみ意味が大きいといえる。

実際のバット製造業の生産構造についてみると、福光町のバット生産は戦後に産地形成が確立されたといえる。現在、福光町にバット生産工場は6社あり、いずれも従業員30人以下の零細企業集団である。しかし、この6社で全国のバット生産量の約50%を生産しているのである。

バット生産量の推移に関しては、木製バットが年々漸減傾向を示している。その理由としては、木製バットの原材料不足によるコストの上昇、金属バットの市場拡大等が挙げられる。現在では金属バットの生産量は安定期にはいり、反対に木製バットの生産量は衰退期にあるといえる。しかし木製バットは、その生産工程に10年以上の年月をかけた熟練技術を必要とし、各々のプロ野球の選手の要求にあったものを作っているという点で、その生産価値は大きいといえよう。故に衰退期にある木製バットではあるが、生産量の激減は当面の間はないと考えられる。

バット製造業は、その生産構造を分析してみる

と様々な問題点が浮彫りにされる。最も大きな問題点は、受注生産形態と、商社・問屋に依存している流通にみられる。バット製造業は販売の主導権を大手スポーツメーカーに握られており、自社ブランドをもつことも新規の販路拡大も困難な状況にある。この他にも様々な問題が動因となって、バット製造業の衰退を引き起こしているといえる。かつては全国のバット生産量の70%を誇っていた福光町ではあるが、現在ではそのシェアも50%と衰退の色を呈している。

こういった衰退の理由としては、産地が福井、大阪、宮崎等全国に拡散したことや、野球人口の減少、そして産地内での業者間の結束が弱いことなどが挙げられる。特に業者間の結束が弱いということに関しては、個々の経営者の意識に問題があるといえる。それぞれが「個」に執着しており、産地内で業者間の結束をはかりとうとする姿勢がみられない。今のバット製造業には、個々の企業が「共同」への転換対策を講じることが必要となってきている。

近年では他分野への転向がはかられており、バットを主とした生産形態から、次第にゲートボールを主とした生産形態へと移行している。このように、バット以外に生産できる商品を開拓していくことが、バット製造業の生き残り策であるといえよう。

今後のバット製造業の展望としては、バット以外のスポーツ用品の多角的生産にとりくみ総合的なスポーツ関連産業を目指すことが、現在の衰退から脱し地場産業として発展する1つの方策であると考えられる。バット製造業は、バット職人の職人魂に支えられており、こういった構造力が今後良い方向に作用することが望まれるところであろう。